論　文

雑誌『亜細亜公論』と朝鮮

裵妗美（ベヨンミ）
（立命館大学コリア研究センター専任研究員）

はじめに

戦前、つまり帝国日本が朝鮮と台湾を植民地として有していた時期に、多くの朝鮮人、台湾人学生が高等教育を求めて日本に渡っていた。その留学生たちは、朝鮮・台湾と日本との関係や世界情勢、日本国内の社会的状況に翻弄されながらも、自分たちのコミュニティを築き、学業と生活を営んでいた。朝鮮人留学生の場合、そのコミュニティは、朝鮮との緊密な関係を保ちつつ、留学生コミュニティ内部の活動を行っていたが、当然ながら日本社会との接点―在学する学校や地域社会、運動組織、日本の雑誌など―も持っていた。その中で、同じく被植民地であった台湾からの留学生、そして中国人留学生との「知」的、「人」的交流も存在した。とくに1920年代初期は、「大正デモクラシー」と呼ばれるほど、比較的多様な思想と行動が共存できた時代であり、朝鮮人留学生が1919年の2・8独立宣言、3・1運動の後、規模としても組織力としても拡大を続けていた時期でもある。雑誌『亜細亜公論』はこのような背景の下で生まれた。

『亜細亜公論』は1922年5月、朝鮮人青年の柳泰慶が「人類主義」、「正義人道」を掲げて東京で創刊した総合月刊雑誌である。1923年1月の第9号（創刊号を第1号として号数を付した。以下、同様）で廃刊となる極めて短命の雑誌である。ただし、朝鮮人、中国人、台湾人、日本人、印度人という執筆陣の多様性と、特定の主義思想にとらわれずアジアにおける普遍的「人類愛」、自由・平等の実現を趣旨とした点などから、アジアの人による「新しいアジア主義」が議論された場であったことは注目に値する。また、『亜細亜公論』は、在東京朝鮮人留学生組織であった学友会の機関誌『学之光』（1914年創刊）の現存が確認できない時期に刊行され[1]、留学生の文章と留学生関連の文章が載っており、亜細亜公論社に留学生をサポートする具体的な計画が存在した点から、朝鮮人留学生研究にとって重要な資料的価値を持つ。朝鮮思想史研究にとっても、日本に先立って朝鮮に支部が設置されるほど読者が存在した点から思想的影響力を推察される上、民族主義と社会主義に両分化される前の多様な思想の交差を見せてくれる意味においても、史料的価値を見出すことができる。

2008年に『20世紀日本のアジア関係重要研究資料 第2部定期刊行資料③』として龍渓書舎から復刻された『亜細亜公論』は、復刻の際、編集と解題を担当した後藤乾一・紀旭峰・羅京洙によって研究されてきた[2]。とくに紀旭峰は、台湾留学生研究の一環として、台湾留学生と朝鮮人、中国人留学生との「知」の交流を論証する中で『亜細亜公論』を研究しており、大いに学ぶところがある[3]。これらの先行研究によって、雑誌の概略と日本・台湾に関する部分はおおむね明らかになったが、朝鮮に関しては主宰者

が朝鮮人であり、朝鮮関係文章も多く掲載されているにもかかわらず、十分に分析されたとは言い難い[4)]。

したがって、本稿では朝鮮人・朝鮮関係を中心に『亜細亜公論』を概要し、朝鮮人執筆者の文章を考察し、特徴と意味を明らかにすることを課題とする[5)]。具体的には、『亜細亜公論』にどのような人々が、どのような問題意識と趣旨の下に集まっていたのかという、雑誌全体の概略を述べた上（第1章）、朝鮮人執筆者の特徴と朝鮮での反応を考察し（第2章）、朝鮮人執筆者の書いた文章の内容を分析する（第3章）。

1.『亜細亜公論』の概略

1-1　東京における朝鮮人と中国人・台湾人留学生の連帯

『亜細亜公論』について日本の新聞は、「亜細亜問題」を扱う、朝鮮、中国、台湾の「青年新人」を中心とする同人雑誌として、日本で朝鮮人が出す最初の雑誌であると報じた[6)]。同誌は、実際には朝鮮人が発行する最初の雑誌ではなかったが[7)]、朝鮮、中国、台湾の留学生・青年、そして日本人が、「正義人道」と「人類平等」の旗の下に集い、「亜細亜問題」に特化して刊行した雑誌は、前例を見つけることができない。表紙も、このような趣旨に相応しく、「公論」の中国語発音の表記を入れた「THE ASIA KUNGLUN」（1～4号）と、「亜細亜公論」のハングル表記である「아시아공론」（6～9号）が併記される場合もあった[8)]。

「言論界の大革命!! 正義人道の急先鋒」というスロ―ガンで登場した亜細亜公論社は、自らの雑誌を「亜細亜各国名士淑女の意見を発表すると同時に、東京に遊学する各国留学生の事情消息を掲載し且つ一般の政経、外交、教育、宗教、社会、労働、女子界、文芸、其他各種掲載」（「社告」3号）と定義した。実際、留学生の消息を載せるだけでなく、朝鮮、中国、台湾留学生が投稿する場合もあった。日本人、朝鮮人執筆者に関しては次節以降で詳しく扱うことにし、ひとまず、中国人と台湾人の執筆者だけを紹介しておこう。

中国人は、戴季陶（戴天仇）、傅立魚、湯鶴逸、張昌言、楊槖吾、胡中和、天了人、酔天生、台湾人は、元・現留学生の蔡培火、黄呈聡、王敏川が文章を書いている。中でも、亜細亜公論社の理事の蔡培火は、当時の在東京台湾人留学生運動の中心を担っており、朝鮮人留学生とも交流があった。一例として、東京で出した朝鮮人の雑誌『青年朝鮮』創刊号（1922年2月）には、台湾人留学生が『台湾青年』という雑誌に対する台湾総督府の苛酷な言論弾圧を糾弾する公開状が、「台湾青年の奮起」というタイトルで載せられている[9)]。

ただし、このような朝鮮人・中国人・台湾人の交流は、『亜細亜公論』が最初ではない。1915年には東京で、朝鮮人約18名、中国人約30名、台湾人約10名の留学生が、日本のアジア侵略からの解放を目指す秘密結社、新亜同盟党を組織した[10)]。辛亥革命と「対華21ヶ条要求」反対運動を背景にして生まれた連帯行動であった。1917年の解散後、1922年に『亜細亜公論』という雑誌の下、再び連帯の場が設けられたのである。

このように「人類主義」や自由と平等の下における朝鮮、中国、台湾、また日本人の交流の場ともいえる『亜細亜公論』の特徴は、原稿の投稿方針にも現れていた。「中国文、朝鮮文、英文其他何れの国文

にしても歓迎」(「投稿歓迎」1号)し、「本文中に各国文を混合したと言ふ事は、特に読者識君に誇りとして告げ得る事である」(「編集余言」1号)というように、全文が朝鮮語、中国語、英語でも掲載できることが「誇り」であるという。主幹の柳泰慶が中国滞在の経験を生かし、「三国語教授」(1号)を載せたこともある。ここには、「はい」、「いいえ」、「ありがとうございます」など、19の簡単な会話文が中国語、日本語、朝鮮語の順番で書かれており、それぞれの発音がカタカナとハングルで記されている。

また、亜細亜公論社は、留学生の文章を掲載するだけでなく、留学生を実際にサポートする事業―寄宿舎設立、運動会・音楽会・講演会・演説会・展覧会・活動写真会等の開催、必要品の実費提供と雑誌無代配布、「国情の相違等にて刑事上の問題」や病気、天災等に遭ったときの相談、図書出版―も計画していた(「本社の事業」2号)。残念ながら、事業の実行については確認できない。柳泰慶が朝鮮人留学生のアルバイト斡旋のために朝鮮総督府出張所を訪ねていたことから[11]、何らかの形でサポートはしていたが、体系的な事業レベルには至らなかったと思われる。ただ、亜細亜公論社がアジアの留学生をサポートし、彼等の力を合わせて「人類主義」を目指していくことを社の方針として明確に定めていたことは明らかである。

なお、執筆陣の中には、R・B・ボース(「印度の現状と其非暴行的独立運動に就て」4号、「新文明の誕生」5号、「世界大戦の責任者」8号、「アフガニスタンに就て」9号)と、K・R・サバルワル(「印度独立の必要と人類の目的」9号)という、日本に亡命していたインドの独立運動家も含まれていたことを記しておく[12]。

1-2 『亜細亜公論』の日本人執筆陣

『亜細亜公論』が日本で発行され、主に日本語で書かれ、日本の植民地支配とアジア侵略問題を扱う以上、日本社会とのかかわり、日本人執筆陣と彼らによる文章も分析すべきである。但し本稿では、紙面の関係とさらなる調査と分析が必要であるため、『亜細亜公論』の創刊に関わったり、文章を掲載した主な執筆者を概略し、その特徴を述べておく。

創刊号には政界、学界、言論界、法曹界など、多彩な経歴の総勢58名(うち日本人は54名)が祝辞を寄せた。その名前と紙面上に記された役職名を明記すると、以下のとおりである(掲載順)。

頭山満、杉謙次、蔡培火(台湾・『青年朝鮮』主幹)、中村金次郎、天野敬一(弁護士)、樂山堂医院、鷲尾勇平(工学士)、栗原清一(医学士)、五百木郎三、江口定條(三菱)、野村竜太郎(工学博士)、坂西利八郎、石橋湛山(東洋経済新報編集長)、三浦銕太郎(東洋経済新報主事)、林獻堂(台湾)、李牧元(中国)、植原悦二郎(代議士)、石丸祐正(東洋印刷会社長)、馬場恒吾(国民新聞編集長)、安川雄之助(三井)、牧野充安(弁護士)、皆川廣量、中野正剛(代議士)、中島石松(石松堂)、石塚英蔵、山口正憲(立憲労働党総理)、高崎介蔵、黄錫禹(朝鮮)、川手忠義(弁護士)、岡崎邦輔(代議士)、佐野寅太(代議士)、寺尾亨(法学博士)、山本倍三(法学士)、友田文次郎(代議士)、藤原俊雄、園田安賢(男爵)、後藤新平(男爵)、永田秀次郎(貴族院議員)、永井柳太郎(代議士)、尾崎行雄(代議士)、星島二郎(代議士)、山下永幸(奉天居留民会副会長)、島田三郎(代議士)、八並武治(代議士)、吉野作造(法学博士)、古谷新吉(自由通信社)、武内止戈(満洲通信社長)、杉

森孝次郎（早稲田大学教授）、田中捨身、日匹亮三、阿部充家（国民新聞）、安部磯雄（早稲田大学教授）、帆足理一郎（早稲田大学講師）、平松福三郎、赤神良譲（文学士）、熊本利平、西原亀三、阪谷芳郎（男爵）

非常に多彩な分野の人物を含んでいるが、政界（代議士）と学界（とくに法学）、言論関係者が目立つ。これまで注目されなかったもう一つの特徴は、黎明会などで留学生と交流していたことで広く知られている吉野作造のほかにも、朝鮮人留学生に直接かかわっていた永田秀次郎、阿部充家、熊本利平、阪谷芳郎の4名の存在である。当時、永田秀次郎は貴族院議員でありながら、朝鮮総督府から留学生監督業務を委託されていた東洋協会の理事であり、阿部充家は斎藤実朝鮮総督のブレーンとして留学生政策に深く関与していた。また、熊本利平は朝鮮群山の大地主として、輔仁会を作り、留学生「支援」を行っており、阪谷芳郎はのちに天道教系の「支援」団体、自彊会を支えた人物である[13)]。ところが、このメンバーの中には、柳泰慶が紙面を通してわざわざ区別を図った、頭山満、寺尾亨、中野正剛等の大アジア主義者の名前も確認できる。しかし、実際に文章を寄せた日本人は、概ね、「大正デモクラシー期を代表するリベラリスト、社会主義者」[14)] たちであった。

全9号を通して執筆回数の多い日本人執筆者を並べると、高辻秀宣（12回）、熊勢岩吉（9回）、坂本哲郎（6回）、宮崎龍介（5回）[15)]、安部磯雄・朝倉都太郎（4回）、大山郁夫・島田三郎・杉森孝次郎・赤神良譲（3回）、永井柳太郎・石橋湛山・布施辰治・尾崎行雄（2回）である。1回のみの寄稿者には、三浦銕太郎、植原悦二郎、佐野学、桑木厳翼、内ヶ崎作三郎、西村真次、遠藤武、鷲尾順敬などがいる。また、高辻秀宣、熊勢岩吉、坂本哲郎など、「プロレタリア文学の影響を受けた作品群」を寄せた早稲田大学の文学青年たちの存在も一つの特徴として挙げられる[16)]。

このように、豊富な執筆陣の中、とくに、島田三郎、尾崎行雄、永井柳太郎、石橋湛山、杉森孝次郎、植原悦二郎、馬場恒吾（「編集余言」1号）、布施辰治、宮崎龍介、長瀬守男、大山郁夫、坂本哲郎（「編集後記」6号）に感謝を表したことから、寄稿その他の支援を受けていたことと思われる。

1-3 『亜細亜公論』の問題意識と趣旨

以上のようなアジアのさまざまな人々が、いかなる思想的基盤の下に集まって『亜細亜公論』を作っていたのかを知るため、発刊趣旨を検討してみよう。まず、亜細亜公論社自ら、発刊の問題意識とその意義を明らかにした文章を紹介する。

もとへ本誌は、亜細亜各国に於ける人種的差別感より来る諸種の弊害を一掃し、各国人に世界的人類愛の自覚を促し、此の自覚を基礎として各人の天分を発揮ささん要望のもとに生れた者である。現今日本の内地に於て発行される雑誌の数は実に夥しいものである。またその中には、東方問題アジア問題を云為するものも決して少なくはない。けれどもアジアに於て虐げられつつある某国など実況を公平に伝へ、且つ人類的、正義人道を基礎として発刊されるものが果たして幾種存するであらうか。殊に朝鮮問題は日本及朝鮮の死活問題である、ここに主眼を注ぎ、公平なる批判を下してゐるものは本誌を借いて他には無いと言つてよいのである。（「本誌発刊の意議」8号、99頁）

つまり、アジアにおける「人種的差別」と「朝鮮問題」の実態を伝え、「公平なる批判」をもってアジアに正義人道、「人類愛」を実現させることが、雑誌の趣旨である。ここでいうアジアにおける「人種的差別」とは、日本人が「民国人（チンチャンポ）、朝鮮人（ヨーボ）が物を言えば、すぐヒガミだと言」い、自分たちの「足場」である「亜細亜を捨て」（発刊の辞「人類の為に」1 号）る行為、すなわち日本によるアジア民族差別である。亜細亜公論社は基本的に、当時の最も緊急な問題は、「資本帝国主義」日本が、国家・民族としての主体性を持つアジアの国家・民族に対して、虐殺・侵略という「人類の罪悪」を犯していることにあると認識していた（巻頭言「人類の罪悪」3 号、巻頭言「人間を人間に還せ」6 号）。

このような認識は、『亜細亜公論』創刊直前の 1921 年 11 月～ 1922 年 2 月の間に行われたワシントン会議（以下、会議と略す）に対する朝鮮人の認識にもつながる。会議は、3・1 運動後のパリ講和会議のときのように、朝鮮人に独立運動のチャンスと期待、希望を与え、留学生も東京で運動を展開したが[17]、そもそも極東・太平洋地域でのより安定した国際秩序の実現、植民地主義体制の再編成を意図したもので、「朝鮮問題」は全く議論されずに幕を閉じた[18]。会議に対して崔雄峯[19]は、口では「人類平等とか四海同胞」を提唱する西洋列強の「言行不一致」と日本の「協同」を批判した上、やはりアジアを中心とする正義人道・自由平等を求めることが、人類の「生存発達」につながると述べた（「東亜の曙」、4 号）[20]。

アジア人が「覚醒」し、アジアにおいて民族差別を撤廃し、自由と平等を実現させ、普遍的な「人類愛」を実現させようとする、『亜細亜公論』の趣旨「人類主義」は、「支那浪人や軍国主義者」らが「日本の侵略主義」を隠ぺいして、日本を中心に西洋へ対抗するために唱えるようなアジア主義とは、アジア中心という面において共通しているが、明確に異なることを宣言し、区別を図っている（「『誌題』懸賞募集」1 号、柳泰慶「亜細亜協会と余」2 号）[21]。

2. 朝鮮人執筆者と朝鮮における反応

では、創刊者の柳泰慶をはじめとする朝鮮人執筆者はどのような人々だったのか、そして朝鮮・朝鮮人にとって『亜細亜公論』はどのような雑誌だったのかについて、検討してみよう。

2-1　朝鮮人執筆者

『亜細亜公論』の創刊者・主幹、柳泰慶（1892 ～ 1950?、平安北道寧辺出身、号は壽泉）は、若くして渡日し、1907 年に正則英語学校を卒業した日本留学経験者である。1912 年に独立運動のために中国へ亡命し、青島大学に入学するが、第一次世界大戦への日本参戦によって、北京に逃れて北京大学に入る。1918 年、「満洲」へ移動して独立運動をしていたときに投獄、1920 年の出獄後、東京にきて『亜細亜公論』を創刊した[22]。柳泰慶がどういう経緯で『亜細亜公論』創刊に至ったのかについては、不明である。

柳泰慶以外の朝鮮人執筆者は、編集兼発行人金光鉉のほか、黄錫禹、白南薫、李相壽、笑海（禹笑海と推定）、金熙明[23]ら元・現留学生と、崔雄峯、金琴湖、李晦光、崔夢斎、朴時奎、可隠生が確認できる。李晦光は、朝鮮有数の名刹海印寺の住持であるが、朝鮮の仏教を日本の仏教に「一元化」させようとし

たことで朝鮮の若い仏教徒に批判されていた人物である[24]。崔雄峯、金琴湖、崔夢斎、朴時奎、可隠生（ペンネーム）、朴園児、朴訥園[25]の学歴・経歴・本名については確認できなかった。

その中、4名が創刊号に全文朝鮮語（ハングルと漢字の混用）で書いた文章を寄せた（付表参照）が、全文朝鮮語の文章は創刊号にしか掲載されていない。編集局はその理由を「印刷所の都合」（「編集局より」2号）と伝えているように、2号までは東京でハングル印刷ができる数少ない印刷会社であった福音印刷合資会社が担当したが、理由はわからないが、3号から印刷会社が変わっている。

2-2　朝鮮における反応

以上のような執筆者が集う『亜細亜公論』は、日本だけでなく、朝鮮、中国、台湾においても反響が大きかった。2号の「編集局より」には、新聞広告もしなかったのに、書店に並べたものはすぐ売り切れ、朝鮮、中国、台湾からの購読申込も連日殺到すると、記されている[26]。当初、購読申込と郵送の方法をとっていたが、4号発行頃から、東京に上田屋、北隆館、至誠堂、東海堂、東京堂の5箇所、京都に大盛社、朝鮮のソウルに滙東書館、廣益書館、平壌に光明書館で販売されるようになった[27]。さらに、その1ヶ月後には、編集兼発行人の金光鉉が、読者50名以上で設置すると創刊号の社告で告知されていた支局を設立するためにソウルに行ったことが、伝えられている[28]。

亜細亜公論社初の総支局である「満鮮総支社」は、支局準備から3ヶ月後の1922年12月、日本に先立って「南北満洲」及朝鮮を管轄区域としてソウルに作られ、呉一相（総支社長）、郭岡（総務兼記者）、朴熙秉（会計兼記者）と、人選も整った[29]。同時に、販売所も平壌の「基督書院」が追加され、朝鮮だけで4箇所に増えていた。

また、朝鮮の読者との質問・応答が載せられることがあった。7号の「読者と記者」欄に、朝鮮の「親日派首領」鮮于鎬[30]について、「万能の権限あるやうにふいちようし良民を苦しめますが……或る意味に於ては真の不逞鮮人である奴は大々的にやつつけて下されば清心丸を服するよりも痛快と思ひます」と、「平壌不逞」からの要望が載っている。これに対して、「総督政治の不徹底に依る関係人物を批判攻撃するとせば限りがありません」という答えが付いている。また8号の「読者と記者」欄には、忠清北道の読者からの質問が寄せられている。

亜細亜公論社内部の資料だけに基づいているため、同時代の朝鮮、日本の他雑誌との比較は難しいが、朝鮮における販売所の数、日本に先立っての総支局設立、読者からの質問等から、朝鮮人の反響がある程度あったことは確かであろう[31]。

3. 朝鮮人執筆者の書いた記事の分析

では朝鮮人読者を引きつけたのは何だったのか。それについて、朝鮮人の書いた文章を、主な筆者による評論と留学生関連文章に分けて分析する。『亜細亜公論』には付表で示したように、朝鮮関連記事が記事の半分を占める場合もあった。その中で本稿では、現実認識がうかがえる評論として、最も多くの文章を寄せた柳泰慶（28本）と黄錫禹（3本）、金琴湖（5本）による文章と、留学生関連文章を取り上げ、その内容と特徴を考察する[32]。

3-1　主宰者、柳泰慶―二人の日本人政治家との対談

①自治・参政権運動、「内鮮融和」への批判

まずは、『亜細亜公論』の主宰者であり、最も多くの文章を掲載した柳泰慶（柳壽泉、壽泉生）の朝鮮問題に対する認識について、「田川氏の朝鮮自治案と柳泰慶」（1 号）から検討してみよう。田川大吉郎が朝鮮自治案を議会に提出するために柳泰慶の意見を聞くという企画で、田川の質問に柳泰慶が答える形での対談がなされた。但し記事の署名は「A 記者」となっている。

総督府の現政に対する朝鮮人の不満について聞く田川の質問に対して、「人類として享くべき当然の要求にある」とし、「人間としての生存権がない、即ち出版、言論、集会、旅行等」の問題が甚だしいと答えた。経済状況については、「征服者気取りで、朝鮮の経済界を支配した」東洋拓殖会社の「卑劣な拓殖方針」によって、苦しくなる一方で、生活用品の場合は日本への依存度が高くなり、朝鮮を離れざるを得ない人も多いと指摘した。本論の自治案について、提出しても衆議院で否決されるに決まっているが、ただ「政治家の仕事」として「国民に真面目に考へさせ」るためだという田川に対し、「さうですか。ぢや矢張りあなたも政治家と言ふよりも人気取りと言ふ意味に於て政治屋ですな」と嘲弄し、売名目的にしても朝鮮民衆が本当に自治を望むのかを調べてから提出するようにと、一喝した。

彼は、朝鮮貴族への参政権付与についても、「全く民意を解せず」、「人道上より甚だ遺憾」と批判した（柳壽泉「朝鮮人の赤心は !!―島田三郎氏著日本改造論を読む―」1 号）。1922 年というと、「親日主義」（「又参政権運動乎―朝鮮の参政権運動者等よ―」1 号）を標榜する国民協会が、初代会長の閔元植が 1921 年 2 月に留学生梁槿煥によって殺されてからも、帝国議会の開会期に向けて参政権請願運動再開のために頻繁に東京を訪れていたときである。朝鮮人留学生や青年の多くは、自治や参政を朝鮮の日本への「隷属」[33] と認識して、批判、反対し、それがのちの『東亜日報』糾弾事件に繋がっていった [34]。

自治・参政権の論理が「内鮮融和」の名の下で出されたものである以上、これに対する批判は当然「内鮮融和」にも及ぶ。ただ「内鮮融和」は、自治・参政権運動に熱心な朝鮮人にとってさえ日本人の好意を買うための「巧言令色」で、「不逞鮮人」も生計のためなら口にするスローガンであって、心から「親日」、「日鮮融和」を説く朝鮮人は皆無だと言えるという（「日鮮融合の職業行商」2 号、105 頁）[35]。柳泰慶は、究極的には朝鮮人を「不逞」扱いして、親日派を生み出し、朝鮮人にして「内鮮融和」を説かせる日本を批判したかったのである。

> 兎もすると日本の新聞は鮮人と書く時には必ず「不逞」の文字を入れる事を忘れない。吾々が行動する全てに対して「不逞」なる有難い語を入れられる事によつて、吾々朝鮮人は如何なる感を持つかを御推察あつて欲しい。人類愛を唱へ、正義人道を叫ぶ人々を称して不逞と言ふ人々こそ却つて不逞人ではないか。（中略）不逞鮮人の語、恁ふして日鮮融合を唱へつゝ朝鮮人の心中を沸騰させる日本人には……（原文のまま）他国を治める能力はないのだ。嗚呼神よ、不逞の語の消ゆるはそも何時か（「吾々は何時迄不逞鮮人乎」2 号、103 ～ 104 頁）

口では「日鮮融合」を唱えつつも、朝鮮人の話しになると自動的に「不逞」の二文字をつける日本人と日本の新聞を、あえて「他国を治める能力はない」と批判している。だが、言い換えれば「不逞」扱

いをしない植民地支配ならいいという意味にも読める。このように、柳泰慶の文章には（のちに紹介する文章も含み）ある意味「現実的」言説が目立つ。検閲の激しい言論状況下、日本で発行される雑誌に主に日本の読者に朝鮮問題を訴えるために書いた文章であることを勘案しても、現実性に安住しているような印象はぬぐえない。

②斎藤総督との対談

柳泰慶は、8月11日にソウルで斎藤総督と直接話したことがある。斎藤に『亜細亜公論』の発刊事業について聞かれた彼は次のように答えた。

> 世間では私を不逞鮮人だの過激派だのと批評しますが、事実を腹蔵なく申しますと、私は排日派でもなし、親日派でもありません。概ね個人乃至民族が相互に親善をはかるといふことは之れは人類の本分だと思ふのです。この条件に違ふ強要的親善は当を得ぬもので、根本的に徹底すれば、私は勿論異議はありません。（中略）私は独立も自治も共に論じません。尤も自由もありませんが！私は只真剣に顕実（ママ）主義を守り、一方言論機関としては朝鮮の為め東洋の為め、亜細亜公論を最も公平なものにしたいと思ひます。（寿泉生「斎藤朝鮮総督と語る」6号、53～54頁）

つづいて、「併合」によって朝鮮が発達したという話について、立派な町が出来ても日本人ばかりで「不対等」にしか見えないと、語った。朝鮮人官吏任用等における「差別撤廃」に関する斉藤の質問には、「名許」であり、「感心出来ぬ」と応じ、教育問題については、警察を減らして必要経費を作るべきだと話した。朝鮮言論について斎藤が「皮肉計り書いては輿論の標準も出来ません」というと、「其れは皮肉を書く種を当局で蒔くからでせう、皮肉計り書くのが商売ではありませんから」といい、『亜細亜公論』も「総督府及閣下に対してする多少の攻撃は勘弁して頂きたい」と語った。最後に、斎藤に対して、「温譲厚徳の君子」で、「朝鮮が当分総督政治であるとせば、他のテカ（マ）ホン（マ）官僚政治家や軍閥などよりも斎藤氏の方が寧ろ朝鮮人には幸福で、彼の如きは他に其人を求め難い」と、高い評価を述べている。

柳泰慶は、斎藤との対談の中、朝鮮統治と斎藤の意見に対する批判や『亜細亜公論』に関する自分の意見を、終始、堂々と披歴した。しかし、自分は「排日」でも「親日」でもないと言い、「強要的親善」を否定するだけで、親善そのものには異議がなく、論じる自由がないからといって、独立を言わないことには、首を傾げたくなる。『亜細亜公論』の発禁処分が続く中、雑誌を存続させるための朝鮮訪問であったことを考えると、極めて現実的な判断だとも言えるのであろう。ただし、面前ならともかく、文章の末尾にわざわざ「温譲厚徳の君子」とまで斎藤を称える言葉を付け加えたことには、植民地朝鮮人として許容できる範囲の「現実的」といえる枠を超えているように思える。

このような柳泰慶について、解題論文を書いた後藤乾一は、上記の斎藤総督との対談内容と三浦銕太郎の「朝鮮に自治を与ふべし」（2号）を比較し、「三浦の早期自治付与論は当時にあってはきわめて先尖的なものであったが、朝鮮青年柳泰慶のほぼ同じ時期の考え方と比べても一歩先を行く感があった」と述べ、三浦を高く評価している[36]。しかし、朝鮮人の自治に対する認識について触れず、三浦の「自治付与」主張が進んだ見解であると判断することは難しい。当時の日本人としては「先尖的」であった

のだろう。しかし、当時の朝鮮人は自治・参政権請願運動を歓迎しなかったことは上述したとおりである。また、1920 年代半ば以降、朝鮮人の中で自治をめぐる激しい対立が起ることを考えると、「早期自治付与論」をもって三浦の思想を高く評価することは、検討の余地がある[37]。

3-2　黄錫禹―「国家」・「民族」・「主義」の否定と朝鮮独立運動

黄錫禹は早稲田大学在学中に朝鮮苦学生同友会や朝鮮人アナーキスト組織の黒濤会のメンバーとして活動し、新人会、アナーキストの岩佐作太郎の率いるエスペラント講習に参加するなど、1920 年代初期の朝鮮人留学生によるアナーキズム運動において欠かせない人物の一人である[38]。

岩佐作太郎への手紙の形式で書かれた「日本の思想界の友に与へて―病褥の岩佐氏の手を通じて―」（1 号）が、黄錫禹の最初の文章である。黄錫禹は「真の朝鮮問題は国家的条件や民族的条件の下に於て解決されるべき性質のものではない」としたうえで、次のように述べている。

> 国家とか民族とか云ふ奴は一つの幽霊になつたのでせう。国家は一つの脱殻であり、民族は蛙に成らぬ前の蝌蚪のやうな物ぢやありませんか？こんなものゝ為に今日のやうな日鮮関係が生じ、そしてこれの為にわれ〳〵朝鮮人が生き血を流さなくてはなくなつたのは悲しむより外に道がないぢやありませんか？岩佐様！悲壮な滑稽ではありませんか、今日の二千万の生きた朝鮮人が、あんな死んだ幽霊の手に依つて其人間としての生存の自由を縛られて殆んど一種の犬豚のアツカヒをされるとは其悲しさの余りにアイタ口も塞がらないぢやありませんか。（中略）僕は今日の朝鮮問題丈は人間運動の予備運動としては多少其意義を認めたいと思つて居ります。勿論、そんな者は、われ〳〵等に取つては、精力浪費、時間浪費の、不経済きはまる、迂遠なる、不必要な、運動に違はないですけれども。マア今日の過激思想取締法案などを拵へるやうな幼稚な、未開な日本国家に対しては已むを得ない手段だらうと思ひます。（中略）今日の国家なる者と主義なる者の人間の自由を拘束する点に於ては其性質を同じくして居ると云へます。ほんとに今日の主義なる者はかの国家の如き侵畧性、征服慾、支配慾とを持つて居ります（34 ～ 35 頁）。

黄錫禹は、アナーキストとして「国家」・「民族」・「主義」を強く否定しながらも、朝鮮問題だけは「人間運動の予備運動」としての意義を認めている。「永久の幻滅―泡と煙気の人形―」（1 号、全文朝鮮語）でも、ある若い詩人の自殺にふれて「主義」と「神」を否定し、「我々の社会革命が遺憾なく成功したとしても、虚無という事実を無くさない限り、我々の生命は真に生かせる道がない」と、虚無主義的な内容をつづった。彼にとって、国家・民族・主義は否定すべき存在であり、虚無（主義）は社会革命が成功してもなお残るものであった。ただし、「主義」は否定しても「社会革命」は否定せず、「民族」は否定しても自由を奪われた朝鮮「民族」の運動は、「人間運動の曙に於ける予備運動」としての意義を持つものと認めている。

このような彼の認識は、「朝鮮独立運動の機関及推移」、「朝鮮独立運動の其の推移」、「朝鮮社会運動の現状」の三つの小タイトルに分けて書かれた長文「朝鮮人の独立運動及社会運動」（2 号）でより鮮明に映し出される。当時、日本で朝鮮人によって書かれた朝鮮の独立運動と社会（主義）運動について、こ

こまで詳細かつ積極的な文章は決して多くない。そのため、削除箇所がかなり多い。

「朝鮮独立運動の機関及推移」では、朝鮮人が「肉体や魂に纏はる一種の堪えがたき痛い迫害を適実に感じ」て生み出した独立運動と社会運動は、趣旨は異なっても、「迫害階級に対する反抗的感情」、「人間としての生存権及自由を得んがための感情」は全く同じであるという冒頭から始まる。今現在は独立運動が優勢でも両運動が「同志」の関係にあるが、朝鮮の労働問題が深刻になる後日には両者の激しい衝突が免れないという。「朝鮮独立運動の其の推移」では、現在の朝鮮独立運動は、全国的かつ科学的、世界的、理論的発展を遂げているとし、朝鮮内、中国、日本、欧米における代表的な運動・言論機関を紹介している。最後の「朝鮮社会運動の現状」では、朝鮮内と日本の代表的な社会主義運動組織と人物が紹介されており、「隠さずに云へば朝鮮社会主義の運動はこれからのものだと思ふ」と括られている。とくに、柳泰慶が二度もコミンテルンと連なる共産主義運動を批判し（「小鍋共産党」3号、「朝鮮留学生の過去及現在」7号）、社会主義者の文章もほとんど掲載されていない『亜細亜公論』の性格上、黄錫禹による社会主義運動の組織と人物の紹介と評価は、特記すべきである[39]。

このように、朝鮮の独立運動と社会主義運動に関して、高い関心と愛情、プライドを持ちつつ、両者の関係に対してこうした見方を持つことは、当時の実態にもかなり近く、運動に直接関与、または関心・愛情を持っていた留学生としては、ある程度、共通した認識ではなかっただろうか。

朝鮮人が書いた文章のなか、前述の柳泰慶と黄錫禹による、とくに1号と2号に掲載されたものが、具体性と批判の強度が最も高い。その後は、1号は朝鮮で、2号は日本でと続く発売禁止もあり、全体的にトーンダウンしたように思われる。実際、「××といつた筆法で、折角特色のあつた奴が、圧迫から穏健となりかけた。維持は出来るやうになつたが、発行の最初の目的に反してゐるために欝悒が絶えない」（「同輩を見まわして」8号）というように、削除や発売禁止などの言論弾圧のため、創刊当初の辛辣な批判がしだいに出来なくなっていった。

3-3　金琴湖―思想言論の問題

金琴湖は、柳泰慶、黄錫禹とともに、最も多くの文章を掲載した朝鮮人筆者である。残念ながら、彼の経歴・学歴は確認できていないが、掲載の頻度と内容からみて、日本在住の朝鮮人の可能性が高いと思われる。彼は、「内鮮融和」の不可なることを冷静に説いた「朝鮮人の本性を省みて融和の可否を惟ふ」（8号）を除いては、主に思想言論の自由や、自由・平等の意義について書いた。

「社会進化の原則たる思想言論の自由について」（6号）では、思想言論の問題とは、当局のいう思想言論の危険性ではなく、むしろ当局の取り締まりと法律の方であり、当局が最近の民衆の思想変遷の速さに追いついていけず、とにかく法律の「形式的適用」で「束縛」すること、それ自体が持つ「危険」性であると指摘している。アナーキズムや共産主義、デモクラシー思想などは、全て「現代の社会を指導すべき一つの高尚なる標準」であるため、これら思想に対する弾圧は、社会にとって大きな「不利益」になると警告した。このような思想言論の取締に対する批判は、1922年2月に議会で提案・廃案となった「過激社会運動取締法案」をめぐる運動や与論、及び『亜細亜公論』が創刊から6号まで3回（1号と5号は朝鮮、2号は日本）も発売禁止処分を受けて押収されたことが背景にある。

思想言論の問題の中で、日本の新聞でみられる朝鮮人問題に関する記事の内容と、それに加えられる

政治の圧力も、金琴湖の批判の対象であった。この問題を如実に見せたのが、新潟県中津川の水力発電所建設工事現場で朝鮮人労働者が虐殺された事件に関する新聞報道であった[40]。「不正不義」極まりない虐殺事件に対し、どの新聞も事実無根と片付けてしまったのである。この事件の背景には「資本家の腐敗」も当然存在するが、それより朝鮮人を「奴隷」、「馬鹿」扱いし、事件に蓋をして新聞にも沈黙を強要する、日本の政治のほうにより大きな責任があると述べた（「買収されたる新聞を葬れ」9号）。

しかし、彼をして思想と言論問題に注目させ、批判させたのは、日本の政治や言論問題だけではなかった。朝鮮においても『亜細亜公論』にかかわる言論問題があった。1922年10月、柳泰慶が、東京の代表的な親日・融和組織である相愛会の会長であり、朝鮮人運動を暴力で妨害していた朴春琴に襲撃される事件があったが、『朝鮮日報』には朴春琴側の情報だけで事実に反する記事を掲載して裁判沙汰になった[41]。襲撃事件自体も問題であったが、より大きな問題は、相愛会関係者が朴春琴の暴行には全く触れず、逆に柳泰慶を親日主義者だと歪曲して書した文章が、そのまま『朝鮮日報』と在朝鮮日本人発行の『朝鮮新聞』に掲載されたことである[42]。

3-4　留学生に関して

留学生は亜細亜公論の執筆者の一員でもあり、亜細亜公論社の主な事業対象でもあった。そのため、留学生関連記事も多く、はじめにで述べたように、その資料的価値も高い。

まず、留学生の現状を述べている文章―「갈돕会를　為하야―健康은唯一의武器오、苦生은無形의学資다」（一記者、全文朝鮮語）、「東京女高師教授の教育差別」（壽泉、以上1号）、「世の軽薄狗鼠輩へ」（壽泉）、「朝鮮留学生春季陸上大運動会を見て」（柳泰慶、以上2号）、「朝鮮留学生の過去と現在」（柳泰慶、7号）がある。これらの文章はいずれも、留学生に対する愛情と苦言が込められており、その内容から、留学経験を持つ柳泰慶個人、亜細亜公論社、留学生との関係をうかがい知ることができる。「갈돕会를　為하야―健康은唯一의武器오、苦生은無形의学資다」では、朝鮮人苦学生組織の갈돕会（1920年6月に東京支会創立、갈돕は「助け合い」を意味する朝鮮固有語）の誕生を祝いながら苦学生の健闘を祈り、「世の軽薄狗鼠輩へ」では世界改造へ励むべき留学生の中に、学資を遊びに浪費したり、「団体党派」を作って争ったり、甚だしくは密偵になって同胞を売る者を「軽薄狗鼠輩」と命名し批判も下す。

また、長文「朝鮮留学生の過去と現在」では、古代から当時までの朝鮮・日本間の留学の歴史と現状を整理した。古代には朝鮮半島からは外交の必要上、官吏を日本に派遣して日本語を習得させる程度であった一方、日本からは「指導研究」のために幾百の留学生が新羅・百済・高句麗に送られたと述べた。ところが明治維新以来、日本の発展と朝鮮王朝時代末期の「弊政」のため、朝鮮は「前進国であるに拘はらず遂に日本に学ばざるを得なくな」り、留学の主流が「日本から朝鮮へ」から「朝鮮から日本へ」に変わったと説明する。現状については、成績がよくなった反面、朝鮮の独立運動と社会運動の根源を成してきた留学生運動が弱体化し、とくに「赤化運動」＝共産主義運動に「売名的虚栄」心で走るものがいると、厳しく批判している。ここまでの内容は、留学生たちに対する激励と内省のメッセージと読み取れる。

一方、日本に対しては苦学生支援と朝鮮の教育拡充を求める。

日鮮融合だの親善だのと云ふ事は、単なる流行語であるから、口丈の御世辞等は後にして、先づ朝鮮人を以て真の同胞と思ひ、将来の運命を共にする意思があるとすれば、不対等には平和なく親善のないものである以上、対等は勿論、朝鮮をして充分にその実力を充実せしむるべく施政行動して貰ひ度いのである。実力の充実は教育及産業の普及促進である。故に将来新朝鮮を荷つて立つべき日本留学生に対しては、之れを善道に導く事を心懸け彼等の為に、精神的にも物質的にも犠牲を払はれたいのである。之れは日本人の責任である筈である。（中略）幸ひ日本人士が覚醒され単に日鮮丈でなく、東洋的、進んでは世界的の大問題であるところの朝鮮を新しい朝鮮とし、建設する事が日本人としての任務である事に考へ至られたならば人類共存共栄の理想に基いたる行動と心懸けとを以て遇せられることを希望して止まぬ次第である（69 頁）。

苦学生支援と朝鮮の教育拡充は日本人の責任と任務である「筈」とあえて強調し、日本人はそのために、「日鮮融和」を言うだけでなく、精神的、物質的犠牲を払って支援すべきであると主張する。朝鮮人学生が日本人学生と対等の教育を受けられてこそ、両民族が「対等」となり、「対等」になれてこそ、平和と親善が成り立つ、ここに朝鮮問題、ひいては世界問題の解決策があるということである。ただ、「責任」とは植民地支配者たる日本の「責任」であって、ここでもやはり彼の「現実的」言説がみられる。

そのほか、「一九二二年度在日本朝鮮留学生各学校卒業生一覧」（1 号）と「留日本朝鮮学生統計表東京及各地方（在学地在学々校出身道別）人員」（6 号）の統計資料も掲載されているが、他の資料では確認することができない、当時の留学生の現況がわかる貴重な資料である。

彼がここまで留学生の現状を詳細に知り、励ましと苦言を呈することができたのは、信頼関係があってのことであろう。しかし、亜細亜公論社の留学生関連事業の実態が分らず、個人的な関係も知るすべがないため、学友会運動会での交流（「朝鮮留学生春季陸上大運動会を見て」）、留学生の思想運動団体、黒濤会の機関誌『黒濤』を紹介（「新刊紹介」6 号）、服役中や出獄する留学生の消息の掲載（「在日本朝鮮人監獄消息」7 号、「近人動静」8 号）などからの、推測の域を超えることができない。

おわりに

以上、1922 年 5 月創刊から 9 ヶ月間、東京におけるアジアの青年たちの思想連帯が作り出した『亜細亜公論』を、朝鮮との関係に着目して考察した。『亜細亜公論』に集った青年たちは、「人類愛」を基本にしてアジア問題、つまり帝国日本による朝鮮・台湾と中国に対する侵略、支配、差別などを批判し、それらを解決して自由・平等が具現されるアジアを目指した。その中、朝鮮人執筆者は日本の植民地支配がもたらした朝鮮問題―政治・教育・言論・思想上の問題―と、それに立ち向かっている朝鮮人の運動や批判精神を、日本社会に向かって発信した。当時の日本における朝鮮人の言論状況からみて、特定の主義・思想にとらわれず、このような文章を朝鮮語でも掲載できた媒体はほかにない。それ故、『亜細亜公論』は留学生とも交流ができ、朝鮮の読者にも共有できたと考えられる。

もちろん、短命であった上、主要広告収入が朝鮮銀行と南満州鉄道などの植民地経営に深くかかわっていた企業に依存しており、共産主義思想が排除され、主宰者柳泰慶の極めて「現実的」認識の上、新

亜同盟党や共産主義運動のようにアジアの解放、つまり植民地支配の全面否定までは主張されないなど、限界はある。しかし、植民地支配を支えた「内鮮融和」や大アジア主義が横行する時代において、アジアの青年たちが朝鮮問題、アジア問題を互いに議論し、アジアを中心とする人類普遍の自由・平等を目指す場であったとは評価できよう。この点について、日本で取得した知識を本国に持ち帰って伝える、一方通行的な留学の捉え方を「双方通行的」なものとして再考させるきっかけをも作ってくれるように思われる。

今後、本稿で取り上げなかった朝鮮人の文芸作品等と日本人執筆者による朝鮮関連文章に関する分析を続け、台湾人執筆者による文章と台湾関連文章との比較しつつ、『亜細亜公論』と朝鮮に関する研究を深めていきたい。

注

1）『亜細亜公論』の刊行時期における『学之光』は、1921 年 6 月発行の第 22 号の後、1926 年 5 月発行の第 27 号まで現存しない。1923 年 3 月発行の第 24 号は当時の新聞広告で発行時期と目次が確認できる(「学之光」『朝鮮日報』1923 年 3 月 5 日付)。第 23 号については確認できないが、第 24 号を考えると、1922 年中に発行されたと推測できる。1925 年 4 月頃に発行された第 25 号と、その翌月に発行された第 26 号はすべて朝鮮総督府に押収された（「学之光再発行」『東亜日報』1925 年 5 月 9 日付、「学之光押収」『東亜日報』1925 年 6 月 2 日付)。

2）同復刻版『亜細亜公論・大東公論　第 1 巻』の解題として、紀旭峰「「半植民地中国」・「植民地台湾」知識人から見たアジア」、羅京洙「朝鮮知識人柳泰慶と『亜細亜公論』―移動・交流・思想―」、後藤乾一「日本近現代史研究と『亜細亜公論』―「アジアの中の日本」を考える素材として―」、そのほかの研究としては、羅京洙「大正期の国際的言論空間　雑誌『亜細亜公論』の再発見」『Journalism』（2010 年 5 月、No240)、「大正期の国際的言論空間　雑誌『亜細亜公論』の再発見 [下]」（同上誌、2010 年 6 月、No241)、後藤乾一「大正デモクラシーと雑誌『亜細亜公論』―その史的意味と時代背景―」（『アジア太平洋討究』第 12 号、2009 年 3 月）が挙げられる。

3）「大正時期在京台湾人留学生とアジア―雑誌『亜細亜公論』を端緒に」『東アジアの知識交流と歴史記憶』東北亜歴史財団、2009 年 10 月（韓国)、「雑誌『亜細亜公論』にみる大正期東アジア知識人の連帯」『アジア文化研究』第 17 集、2009 年 11 月（韓国)、「大正期在京台湾留学生と東アジア知識人―朝鮮人と中国人とのかかわりを中心に―」『アジア太平洋討究』第 15 号、2010 年 10 月、『大正期台湾人の「日本留学」研究』龍渓書舎、2012 年。

4）解題と研究で朝鮮との関係を研究した羅京洙は、発行者の柳泰慶個人については詳細に分析しているが、雑誌と朝鮮との関係全体、たとえば筆者と掲載文章の論証には至っていない。

5）本稿の課題を充分に分析するためには、当然日本人筆者の朝鮮関連記事も合わせて分析しなければならないが、紙面の制約と日本思想史研究との関係をより明らかにする必要があるため、別稿に譲りたい。

6）「日本で出す朝鮮人最初の雑誌」『東京朝日新聞』1922 年 5 月 11 日付、「『亜細亜公論』再度発売禁止」『国民新聞』（4 号から再引用)。

7）1922 年には、在東京朝鮮人留学生学友会の機関誌『学之光』、アナーキズム・共産主義系の『大衆時報』、『青年朝鮮』、『黒濤』や仏教関係の『赤蓮』などが発行されていた。その多くが当局の検閲によって、発売禁止・押収を余儀なくされ、発行・現存状況を把握することは難しいが、発行の史実を見逃してはいけない。後藤乾一は、1922 年 11 月の特高警察資料を引用し、『学之光』など、ほとんどの朝鮮人雑誌は「5 ヶ月以内に消滅」したと述べている（後藤乾一、前掲論文、「日本近現代史研究と『亜細亜公論』―「アジアの中の日本」を考える素材として―」、10 頁）が、史実とは異なる。

8）たとえば、1 号の表題は「THE ASIA KUNGLUN　人類主義　亜細亜公論」、9 号の表題は、아시아공론　THE ASIA REVIEW　新年号　亜細亜公論」となっている。後藤乾一は「KUNGLUN」を「公論」のハングル表記であるとしたが、「公論」の朝鮮語発音をアルファベットで表記すると、「KONGLON」である。よって、『亜細亜公論』の性格及び、柳泰慶が中国語が堪能なこと、発音表記が朝鮮語よりは「公論」の中国語発音「Gōng lùn」に近いことから、筆者は中国語表記であると考える（後藤乾一、前掲論文、「大正デモクラシーと雑誌『亜細亜

公論』―その史的意味と時代背景―」、151、152 頁)。

9) 『青年朝鮮』創刊号、1922 年 2 月(朴慶植編『日本植民地下の在日朝鮮人の状況』(『朝鮮問題資料叢書』第 12 巻、アジア問題研究所、1990 年所収)。

10) 新亜同盟党の詳細は、小野容照「植民地期朝鮮・台湾民族運動の相互連帯に関する一試論―その起源と初期変容過程を中心に―」(『史林』第 94 巻第 2 号、2011 年 3 月)を参照されたい。

11) 「亜細亜公論社長京城日報を名誉毀損で訴ふ」『読売新聞』1922 年 12 月 27 日付。

12) ほかに、「ウィリアム・デビス」の「羅馬時代の財産結婚」(3 号)もあるが、この人物については、詳細がわからない。この他、中国人、台湾人執筆者やその文章に関する詳細は、紀旭峰の前掲論文「「半植民地中国」・「植民地台湾」知識人から見たアジア」を参照されたい。

13) この 4 名と朝鮮人留学生との関係に関する詳細は、拙稿「一九二〇年代の『内鮮融和』政策と在日朝鮮人留学生―寄宿舎事業を中心に―」(『歴史評論』第 729 号、2011 年 1 月)、「朝鮮総督斎藤実と阿部充家による朝鮮人留学生『支援』」(『日韓相互認識』第 4 号、2011 年 3 月)、裵姈美編『在日朝鮮人資料叢書 6　在日朝鮮人留学生資料 1』(緑陰書房、2012 年)所収の解説「在日朝鮮人留学生資料―一九二〇年代を中心に」を参照されたい。

14) 後藤乾一、前掲論文、「日本近現代史研究と『亜細亜公論』―「アジアの中の日本」を考える素材として―」、26 頁。

15) 宮崎龍介(1892 ～ 1971)は東京帝大法科を卒業し、黎明会の機関誌『解放』の主筆、弁護士、社会運動家として活動した人物である。

16) 文学青年に関する詳細は、後藤乾一の前掲論文「大正デモクラシーと雑誌『亜細亜公論』―その史的意味と時代背景―」(164 ～ 167 頁)を参照されたい。

17) ワシントン会議に対する留学生運動については、拙稿、前掲論文、「朝鮮総督斎藤実と阿部充家による朝鮮人留学生『支援』」を参照されたい。

18) 長田彰文『日本の朝鮮統治と国際関係―朝鮮独立運動とアメリカ　1910 － 1920』平凡社、2005 年、334、338 頁。

19) 崔雄峯の学歴・経歴はわからないが、1921 年 7 月 26 日に「経済界の前途」という文章を東京から『毎日申報』に寄せて掲載したことから、経済を学ぶ留学生であったと推測できる。

20) 会議に関する文章は、「果して平和会議であつたか、或は次回の大戦争の予備会議であつたかを疑はざるを得ない」と批判した、李相壽の「日支交渉を論じて現代強国の政策を弾劾す」(2 号)もある。

21) 『亜細亜公論』が、自らのアジア中心主義は「窮屈な軍国主義者」、「支那浪人」のアジア主義とは異なるとわざわざ宣言するように、アジア主義は孕む思想の幅はあまりに多様で広い。実際、民権派から玄洋社、黒龍会、中国の孫文まで自分らの思想を「アジア主義」と称していた。ただ、明治維新以降の日本の膨張主義の中から一つの結実としてアジア主義がうまれたことは事実である(竹内好「アジア主義の展望」『現代日本思想大系 9　アジア主義』筑摩書房、1969 年、12 頁)。本稿では「アジア主義」の多様性・複雑性、学術的議論を踏まえた上で、本文で記したように、アジアに対する侵略主義を帯びている「アジア主義」という意味で「大アジア主義」と表現することを断っておく。

22) 羅京洙、前掲論文、「朝鮮知識人柳泰慶と『亜細亜公論』―移動・交流・思想―」、37 ～ 39 頁。柳泰慶は、1923 年の『亜細亜公論』廃刊後、当局による「追放」の形で、米国に渡り、留学したという。

23) 金光鉉は、在学先などの詳細は不明だが、1921 年に作られた天道教青年会東京支会の創立メンバーで(曺奎泰『天道教의 文化運動論과 文化運動』韓国史研究叢書 13、国学資料院、2006 年、123 頁)、黄錫禹は早稲田大学専門部政治経済科在学中に、朝鮮人苦学生・労働者団体の同友会の幹部を勤めたが、1922 年 9 月に除名された(「消息」『青年朝鮮』創刊号、波田野節子『日本留学生作家研究』ソミョン出版、2011 年、667 頁、韓国)。白南薫は 1917 年に早稲田大学政治経済科を卒業して在東京朝鮮 YMCA の総務を勤めており(白南薫『나의 一生』、白南薫先生記念事業会、1968 年)李相壽は、早稲田大学政治経済科在学中で、学友会役員や苦学生同友会のメンバーとして活動中(韓国歴史情報統合システムより)、禹笑海は、日本大学芸術科在学中、もしくは卒業生である。金熙明は日本大学専門部社会科在学中であった(朴庚守「日帝下 在日文学人 金熙明의 反帝国主義文学運動의 研究―그의 詩와 文学評論을中心으로」『日本語文学』第 37 輯、2007 年 5 月)。

24) 「妙心寺派と朝鮮寺刹」『中外日報』1920 年 6 月 4 日付、「日鮮仏教提携反対―鮮人学生の運動―」『中外日報』1920 年 6 月 26 日付、「朝鮮仏教改宗問題の運動者李晦光に対する仏教青年会の宣言」『朝鮮日報』1920 年 6 月 28 日付など。

25) 朴訥園は、文章の内容から中国に在住する朝鮮人であることは確かであるが、それ以上は確認できない。

26) 発行部数は、創刊号と 2 号が 2 千部、3 号が 3 千部、4 号が 2 千部、5 ～ 7 号が 2 千 5 百部であるという(後藤乾一、前掲論文、「大正デモクラシーと雑誌『亜細亜公論』―その史的意味と時代背景―」、156 頁)。例えば、学友会機関紙『学之光』は通常 600 ～ 1000 部ほどで多くは 1600 部が発行され(警保局保安課「朝鮮人概況」

1918 年)、朝鮮の雑誌『開闢』(1920 ～ 1926)は通常 8 千部、最大 1 万部が発行されていた(임경석 , 차혜영 외『『개벽』에 비친 식민지 조선의 얼굴』모시는 사람들、2007 年、235 頁)。

27) 4 号奥付。なお、ソウルの廣益書館と平壌の光明書館は『学之光』の販売所と同じところである。

28) 「近人動静」5 号。

29) 「編集後記」8 号、「社告」9 号。呉一相はのちに東亜日報奉天支局長(1926 年)となったことが確認できるが、郭岡と朴熙秉に関しては確認できなかった。

30) 原資料には「鮮于琦」と書かれている。鮮于錡(1891 ～ 1933)は、日本警視庁高等警察の密偵として知られる鮮于甲の兄で、3.1 運動以降、斎藤朝鮮総督から機密費をもらって朝鮮の知識人や宗教界の動向を報告し、弾圧を手助けしたことで、大韓民国臨時政府が「売国敵」として殺害してもよいという「可殺対象者」と選定した。その後、ワシントン会議に対する朝鮮人の運動を阻止しようとし、「内鮮両民族の共存共栄」をかかげた大東同志会の会長、朝鮮中枢院参議などをつとめた人物である(民族問題研究所親日人名事典編纂委員会『親日問題研究叢書人名編 2(ㅁ～ㅇ)親日人名事典』2009 年、286、287 頁)。

31) また、読者だけでなく、「交換」という形で、朝鮮内の言論機関との交流も行っていた。そのリストには、総督府や親日団体の出していた、日本文『朝鮮』・朝鮮文『朝鮮』、『京城日報』、『時事評論』や、朝鮮人が発行する『開闢』、『新天地』、『東亜日報』、『朝鮮日報』などが含まれている(「交換書目」8 号)。

32) 評論のほか、文芸作品や朝鮮の「特派記者」による、朝鮮の歴史、文化、宗教、社会の紹介文も載せられている(付表の■参照)。ただし本稿では、紙面の制約もあり、この部分の分析までに踏み込めなかったため、別稿に譲りたい。

33) 「内政独立運動反対激烈」『独立新聞』1922 年 10 月 30 日付。

34) 1924 年 1 月 2 日から 6 日まで、『東亜日報』が妥協的自治運動論を説く社説「民族的経綸」(李光洙)を 5 回連載し、当時の留学生など朝鮮人青年から大きく反発を買った事件である。「内鮮融和」に対する留学生や青年たちの批判、反発などについては、拙稿、前掲論文、「一九二〇年代『内鮮融和』政策と在日朝鮮人留学生―寄宿舎事業を中心に―」を参照されたい。

35) 当時、朝鮮人の「内鮮融和」への批判に関する詳細は、拙稿、前掲論文「朝鮮総督斎藤実と阿部充家による朝鮮人留学生『支援』」の第 1 章を参照されたい。

36) 後藤乾一、前掲論文、「大正デモクラシーと雑誌『亜細亜公論』―その史的意味と時代背景―」、155、156 頁。

37) さらに、その「朝鮮に自治を与ふべし」には、「韓国併合」は「李朝期に内紛を繰り返し自らを弱体化させた『朝鮮人自身の罪』」でもあり、「苛酷な日本統治の結果『俄に朝鮮人民をして民族的自治独立の、必要を痛感させ、李朝の下に於ては、百年尚且つ難きを思はしめた程の大覚醒を鮮人に喚起』する結果になった」(後藤乾一、同上、155 頁、『』内が原文引用)と記されている。史実と異なる部分を含む、当時の三浦の意見を批判的に分析できないまま評価していることは残念に思える。これ以上、柳泰慶の思想と言論活動を分析するには資料が不足する。柳泰慶について解題論文を書いた羅京洙も指摘したように、これまで全く知られていない人物で、一次資料もほとんど残されておらず、さらなる資料調査を要する。

38) 黄錫禹と朝鮮人アナーキストに関する詳細は、金明燮『韓国 아나키스트들의 独立運動』(이학사、2008 年)を参照されたい。

39) 小野容照はこの性格の故、『亜細亜公論』は同時代の共産主義を共通理念とする連帯とは相容れないものであると評した(前掲論文、66 頁)。

40) この事件に関する詳細は、拙稿「一九二二年、中津川朝鮮人労働者虐殺事件」(『在日朝鮮人史研究』第 40 号、2010 年 12 月)を参照されたい。

41) 「亜細亜公論社長京城日報を名誉毀損で訴ふ」『読売新聞』1922 年 12 月 27 日付。なお、柳泰慶の妻、金泰恩が韓国の国家報勲処功勲審査課に提出した自筆証言資料によると、朴春琴の襲撃は、日本当局が朴春琴に柳泰慶を殺すように指示したことによるものであるという(羅京洙、前掲論文、「朝鮮知識人柳泰慶と『亜細亜公論』―移動・交流・思想―」46、47 頁)。

42) なぜか、当該記事が載ったはずの 1922 年 11 月の 1 ヶ月分の『朝鮮日報』が現在残っておらず、どのように報じられたか、朝鮮日報社が柳泰慶の告訴にどのように対処したのかに関しては確認できない。なお、朝鮮新聞については確認することができなかった。

表 『亜細亜公論』朝鮮関連記事		
執筆者	タイトル	コーナー名、補足、その他
創刊号	1922年5月(全体記事46本／朝鮮関連・朝鮮人執筆者の文章23本)	
柳泰慶か？	人類の為に	巻頭言
壽泉	朝鮮人の赤心は!!	島田三郎氏著日本改造論を読む
島田三郎	真実に生きよ	「韓国併合」について
黄錫禹	日本の思想界の友に与へて	病褥の岩佐氏の手を通じて
石橋湛山	日本は大日本主義を放棄す可し	
赤神良譲	亜細亜民族と被搾取階級	
白南薫	亜細亜公論의発刊을祝함	朝鮮語
可隠生	国際聯盟의背景을述하야其実現과将来를論함(一)	朝鮮語
一記者	갈돕会를위하야－健康은唯一의武器오、苦生은無形의学資다	朝鮮語
黄錫禹	永久의幻滅－泡와煙気의人形－	朝鮮語
	朝鮮浪人の内政独立運動乎	悲鳴乎、雄叫びか
	一九二二年度在日本朝鮮留学生各学校卒業生一覧	42名
一記者	田川氏の朝鮮自治案と柳壽泉	帝国議会提出のため田川大吉郎と対談
	吉野博士と柳氏との会話を聞く	懇談会、物質文明<精神
壽泉	親日を迫るよりも朝鮮は如何？	評論一束
	現代基督教信者の幽霊	
	朝鮮貴族及富豪の反省を求む	
	又参政権運動乎	
	東京女高師教授の教育差別	
	京城毎日申報の卑劣行為	
一記者	朝鮮事情新聞の一節より－朝鮮人の電車道徳	
熊勢岩吉	柳壽泉君に与ふ	
壽泉	三国語教授	
壽泉訳	櫻寧と王生の恋（聊齊より）	■文芸
2号	1922年6月(33／15)	
三浦鉄太郎	朝鮮に自治を与ふべし	ほぼ全文削除
赤神良譲	亜細亜革命と世界革命	
島田三郎	日韓相互の真利益	
黄錫禹	朝鮮人の独立運動及社会運動	削除箇所多
日本ABC	国家の行向－朝鮮の未知の友へ－	
李相壽	日支交渉を論じて現代強国の政策を弾劾す	
壽泉	天職を失へる現代の新聞と記者	
可隠学人	故金玉均に就て	
	所謂親日派と排日派（削除箇所多） s	評論一束
	世の軽薄狗鼠輩へ	
	吾々は何時迄不逞鮮人乎	
	日鮮融合の職業行商	
	亜細亜協会と余	
柳泰慶	朝鮮留学生春季陸上大運動会を見て	

壽泉	阿繊（聊齊より）	■文芸
3 号	1922 年 7 月 (24 ／ 10)	
N 生	警察官の暴行と朝鮮の政治△此の事実を如何に観る？△	文化政治批判・日本人
笑海	平和博朝鮮視察団に就てー無法な日本人指揮者を難ずー	
李晦光	朝鮮佛教界の現状打破	■社会化、当局の鞭撻
壽泉	鳳仙（聊齊より）	■文芸
熊勢岩吉	大同江夜話	■文芸
	留学生と日本語ー民国留学生の熱心を望む	走馬灯
	高麗忠臣鄭圃隠、漢詩■	
	小鍋共産党	
	朝鮮殿入選数■	
	本誌発売禁止に就て愛読者諸士に報ず	
4 号	1922 年 8 月（23 ／ 3）	
熊勢岩吉	朝鮮独立運動の真相	削除箇所あり
崔雄峯	東亜の曙	
金瀅璘	在米の友より	■偏見漫語（柳泰慶への手紙）
5 号	1922 年 9 月（27 ／ 8）	
内ヶ崎作三郎	英国の社会教育運動を論じて朝鮮問題の研究に資す	日鮮融合、文化施設、在朝日本人の社会教育必要
金琴湖	思想圧迫の露西亜の今昔を見てその効果を惟	
	朝鮮と所得税問題ー日本直訳主義とは考へ物ー	■民鮮事情
	開城に幼年監獄生るー目下建築中ー	
	京城の巡査	
	天道教の状勢	
	総督府人事異動問題	
壽泉生	林長民氏を訪ふ	
6 号	1922 年 10 月（19 ／ 7）	
金琴湖	社会進化の原則たる思想言論の自由について	
	留日本朝鮮学生統計表	
新居格	信川電化工事中の怪聞に因んで抱懐を述ぶ	
	地獄谷事件に就いて	
	信川電化工事中の怪聞　朝鮮人虐殺に対する批判	
特派記者通信	斉藤朝鮮総督と語る（壽泉生）	
金熙明	詩調	■青山裡碧渓水、文芸
7 号	1922 年 11 月（27 ／ 6）	
	朝鮮人虐殺に対する批判の二	
柳泰慶	朝鮮留学生の過去と現在	
	同光会は何をする？	顕微鏡（読者投稿）
	朝鮮人の代名詞たる「ヨボ」の意義と日本人の根性	朝鮮事情
	朝鮮に於ける現在の人口■	
	在日本監獄朝鮮人消息	徐相漢、全敏轍、梁槿煥

8号	1922年12月（30／8）	
鷲尾順敬	現今の宗教問題と朝鮮の佛教	亜細亜に於ける宗教問題
崔夢斎	朝鮮基督教の今昔	
布施辰治	弁護士の新使命－金烱斗、韓恨祖両君に宛てゝ	
金琴湖	朝鮮人の本性を省みて融和の可否を惟ふ	削除箇所あり
特派記者	同光会のふしだら	■朝鮮近事
	地方長官の更迭の余波	
柳壽泉訳	鳳陽の士人	■文芸
一記者	漢城銀行の頭取李允用取引停止処分を受く（通信）	■
※	近人動静（全敏轍・金松殷・李興三出獄）、『朝鮮之光』広告	
9号	**1923年1月（38／16）**	
社同人	東洋平和と世界平和＝ワシントン会議の決議は雷動か？	ほぼ削除
朴園児	ガンチイ瞥見	
琴湖	買収されたる新聞を葬れ	削除箇所あり
朴訥園	血で血を洗ふ満洲保民会の実情	在中朝鮮人親日団体問題
今川宇一郎	満鮮問題を論ずる人達へ	
遠藤武	朝鮮総督の変態的文化政策	
西村真次	日鮮同系論	
朴時奎	漢詩六韻	半分以上削除
石橋湛山	政治的独立と経済的独立の相互関係－東洋諸国民に望む－	削除箇所あり
澤田天峰	朝鮮の開発と其経済力	
	天道教の教育事業と同教青年会の組織	■
金琴湖	労資問題に対する自由平等私見	
佐野学	弱小民族の搾取と資本主義	
柳壽泉	白干玉（聊齊より）	■文芸
熊勢岩吉	京城で逢つた女の話（随筆）	■文芸
金熙明	平壌感別曲（朝鮮詩歌）	■文芸
※	急告（朝鮮日報問題）	